

マルクス・エンゲルス選集

第九卷

ヨーロッパの経済恐慌

資本主義的生産に先行する諸形態

直接的生産過程の諸結果

恐慌と信用
経済学手稿集

マルクス＝エンゲルス選集

第 9 卷

マルクス・レーニン主義研究所編

恐慌と信用
経済学手稿集

大月書店刊

一九五四年三月十五日 発行

第九卷 定價 四二〇円

編集者

マルクス・レーニン主義研究所

発行者

東京都文京区本郷一丁目一五番地
小林直衛

印刷者

東京都文京区柳町二六番地
山元正宜

発行所

東京都文京区
本郷一丁目一五番地

大月書店

電話小石川(92)三〇九一番
振替・東京一六三八七番

凡 例

一 原註は（原註1）と、異文考証等についての編集者（訳者）による註は*印で標示し、その註釈文はそれぞれ註を必要とする個所の直後に、訳者による註は（1）（2）等と標示し、その註釈文は（註1）（註2）等として各論文、手紙の末尾に一括し、なお簡単な訳註は〔……〕として六号活字で本文中に挿入した。原文にある挿入句は（……）で挿入した。

二 原文で一般的に使用されている國語以外の原語は、原則としてその訳語の直後に（……）で挿入した。

三 引用文は「……」で、引用文中の再引用箇所は『……』でしめした。

四 著書、新聞、雜誌その他の出版物の書誌名または著作題名等は『……』でしめした。

五 原文中斜字体または隔字体イタリックになった個所は、訳文ではゴチック活字または傍点をつけて標示した。

六 地名、人名はなるべく現地の発音にちかく表記することを原則としたが、従来の慣用をも考慮した。

七 手紙は主題に関係ある部分の抄訳にとどめ、文調も手紙であることに格別の考慮をはらってはいない。

八 本選集の訳文は、それぞれの訳者が担当し、校訂者によって原典と各國語訳とを逐語的に参照し、内容上と用語用上との校訂がなされ、文調にも一應の統一がはかれたうえ、なったものである。

恐慌と信用
経済学手稿集

目次 第九卷

経済恐慌の研究

ヨーロッパの経済恐慌 (マルクス).....	一
フランスの経済恐慌 一 (マルクス).....	二四
フランスの金融情勢 (マルクス).....	三三
イギリス商業の激動 (マルクス).....	三九
フランスの商業恐慌 (マルクス).....	四九
フランスの経済恐慌 二 (マルクス).....	五七
商業恐慌と貨幣流通 (マルクス).....	六四
イギリスの商業と金融 (マルクス).....	七一
金融パニック (マルクス).....	七八
大ブリテン——金融市場の緊迫状態 (マルクス).....	八四

信用制度の研究

フランスのクレディ・モビリエ	一 (マルクス)		一八七
フランス銀行にかんする新法律 (マルクス)		二二	
フランスのクレディ・モビリエ	二 (マルクス)		二八
一八四四年のイングランド銀行條令の効力停止 (マルクス)		二三	
フランスにおける穀物價格調整案 (マルクス)		二三	

工場工業——富と貧困の増大

工場労働者の状態 (マルクス)		一九
イギリスの工場制度 (マルクス)		四四
イギリスの重要文書 (マルクス)		五五
イギリスにおける精神病患者数の増加 (マルクス)		六四
イギリス工場工業の状態 一 (マルクス)		七一
人口、犯罪、貧困 (マルクス)		八九
工場工業と商業 (マルクス)		九八

イギリス工場工業の状態	一一	(マルクス)	二〇五
-------------	----	--------	-----

経済学にかんする手稿

資本主義的生産に先行する諸形態	(マルクス)	二二三
『経済学批判』の準備的労作から	(マルクス)	
一		二八五
二		三二四
三		三二九
直接的生産過程の諸結果	(マルクス)	
一 剰余価値の生産としての資本主義的生産		三六〇
二 資本主義的生産は特殊的・資本主義的生産関係の生産および再生産である		四六五
三 資本の生産物としての商品		四七四

經濟恐慌の研究

ヨーロッパの經濟恐慌（マルクス）

一

——『ニューヨーク・デイリー・トリビュン』

一八五六年十月九日号所載 無署名——

ヨーロッパの現在の投機時代の特徴は、その投機が普遍的な性格をもっていることである。いままでにもやはり、いろいろのはげしい投機熱——穀物熱、鉄道熱、鉱石熱、銀行熱、紡績熱——一言でいえばありとあらゆる種類の投機熱があった。しかし一八一七年、一八二五年、一八三六年、一八四六—四七年の各大商業恐慌のときには、どの商工業部門でもなんらかのかたちで刺激をうけないものは一つもなかったとはいっても、それでもなお、おのおのの時期に特別の色あいと性格とをあたえたものはただ一つの主要な投機熱であった。經濟のあらゆる部面が投機の精神にとらわれていたのに、どの投機者もなお自己の専門の部面にとどまっていた。これに反して、現在の投機熱のない手であるクレディ・モビリエ⁽¹⁾の指導原理は、ある一定の方向にそった投機ではなくし

て、投機のうえでの投機であり、詐欺の集中化と平行したその普遍化である。なおそのほかに、現在の投機熱の発生と増大とは一つの特異性がある。すなわち、その投機熱がイギリスではなく、フランスではじまったことである。フランスの投機者の現在の血すじのものと、上記の諸時期のイギリスの投機者との関係は、ちょうど、十八世紀のフランス理神論者と十七世紀のイギリス理神論者との関係とおなじである。一方は内容をあたえ、他方は、理神論が十八世紀に全文明世界に普及することを可能にした一般化の形式をつくりあげたのである。ところでイギリス人は、投機の源が彼らのうつくしい節度ある島をさって、専制君主たちが、圧迫し無氣力にしたこの乱雑な大陸に遠ざかっていったことを祝っているようなかたむきがある。しかしこの場合彼らは、イングランド銀行の聖堂内の金準備に影響をあたえずにはおかぬフランス銀行の月次報告書を、彼らがどのような不安をもって注視しているかということをおかぬ。彼らは、ほかでもないイギリス資本こそがヨーロッパのもろのクレディ・モビリエの動脈に不死の妙薬を主として補給しているのだ、ということをおかぬ。また彼らは一億一千万ポンドにたった輸出額をさしめしながら彼らがこんにもほめそやしているイギリスの「健全な」在荷過充と過剰生産とが、じつは、一八五四―五六年の彼らの自由主義的政策がボナパルトのクーデター⁽²⁾の申し子であったのと同様に、彼らがいま大陸であばきたてている「不健全な」投機のおなじうみの子であるといふことをわすれている。しかしそれにもかかわらず、いわゆるクレディ・モビリエがあらわしているような、皇帝的社会主義とサン・シモン主義の取引所投機と哲学的詐欺とのかの奇妙な混合物がくりだされたことについて、彼らには責任がないということをおかぬ。否定することはできない。イギリスの投機は、大陸的繊細さとはするどい対照をしめして、大っぴらの、かざりたてられもしなければならぬものによってもやわらげられないベテンの、

もっとも粗雑な、もっともそぼくな形態にたちかえたのである。單純な詐欺というものが、ボールやストライヘンやベイツの⁽³⁾、ティパレリー銀行の、そしてまた、コール、ダヴィッドソン、ゴードンの⁽⁴⁾大シテイ銀行のサドラ⁽⁵⁾式取引の神聖な思ひ出の全秘密をなしていたのだ。そしてこの詐欺はまた、ロンドンのロイヤル・ブリテン銀行の⁽⁶⁾うらがなしい單純な物語をあらわしている。

会社の資本をくいつくしたり、それと同時に預金者や無經驗の株主たちを欺瞞的な報告書でだますことによつて、莫大な配当金で株主を元氣づけたりするためには、重役連中にとつて特別の器用さは入用でない。そのために必要ないっさいのもの——それは、イギリスの法律である。ロイヤル・ブリテン銀行の事件は、資本の額によるよりも、株主ばかりでなく預金者のなかでこれに関係した難魚^{ざいご}なかまの数の大きさによつて、センセイションをひきおこした。この企業内での分業は、一見してきわめて簡單であつた。重役には二つの部類があつて、一方の重役は、銀行の事業のことはなにも知らずに汚点のない良心をたもつたということのために、年一万ドルの俸給を平然とポケットに入れた。ところで、他方の重役は、實際に銀行の管理に従事した。ただし銀行のおもな顧客、あるいはより正確にいえば、私消者になるという唯一の目的をもつて。この第二の部類の重役は、自分たちのくだらない仕事ではずをぐあいよくとのえるのは支配人しだいであるから、彼らはなにはさておいてもまず第一に、支配人にたいして彼が自分のけちな仕事を自分によろしくてはずをととのえる可能性をあたえてやる。また支配人のほかに、彼らは銀行の監査役や顧問弁護士にも自身の秘密をうちあけなければならない。そして監査役や顧問弁護士はこれによつて貸付のかたちで賄賂をうけとるのである。彼ら自身と彼らの名義でその親類縁者にあたえられる貸付にくわえて、重役と支配人は、若干数の傀儡^{かいらい}をつくり、その名義でさらに以上のも

貸付を着服する。拂込資本総額は現在十五万ポンドにたっているが、そのうち一二一、八四〇ポンドは直接間接に重役によって着服されてしまった。グラスゴー選出の代議士で統計学にかんする著書の有名な著者である銀行創立者マックグレゴア⁽⁷⁾氏は、銀行にたいして七、三六二ポンドの負債をもってむくいた。また他の重役でテュークスベリ選出代議士ハンフリー・ブラウン⁽⁸⁾氏は、その選挙費用をまかなうために銀行を利用したが、彼はあるときは銀行にたいして七万ポンドの債務をおっていたし、そしていまでもなおきっかり五万ポンドほどの債務がのこっているようである。また支配人カメロン⁽⁹⁾氏は三万ポンドにのぼる貸付をかきあつめた。

その業務開始のそもそものはじめから、銀行は毎年五万ポンドの欠損をしていた。ところが、重役たちは企業
の繁昌について年々歳々株主たちにお祝いをいつていた。出納係のコールマン氏の言明によると、事業状態からすればどのような配当も株主に支拂わるべきでなかったにもかかわらず、六パーセントの配当が四半期ごとに支拂われた。やっと去年の夏になって、三十七万ポンド以上もごまかした計算書が株主に呈示されたが、この額のうちマックグレゴア⁽⁷⁾・ハンフリー・ブラウン⁽⁸⁾・カメロン⁽⁹⁾商会に供給された貸付は、流動証券というあいまいな項目のもとにいれられていた。銀行がもはや完全に支拂不能におちいったとき、新株が発行され、それとともに業務の成功をつたえる誇大な報告書がだされ、重役の信任投票がおこなわれた。この新株発行はけっして銀行の窮状をすくう最後の死にもぐるいの手段としてではなく、單純に重役の詐欺にとつてあたらしい材料をあたえる方法として予定されたものである。銀行が自行の株式を賣買するのを禁止したことは定款の基本條項の一つであったが、しかしその株式が重役の手のなかで下落するとすぐに、銀行自身の株式を担保という名目で銀行にあたえるという慣習がずっと存在していた。重役のうちの「実直な部分」がどのような方法でいけば一杯くわされた

かは、株主総会の席上で重役の一人オーウェン氏がつぎのようなことばでかたっている。

「銀行開業の準備がすべてになったときにカメロン氏が吾々の支配人に任命されたが、吾々はまもなく、いままでロンドンの一つの銀行にも関係したことなかった人が支配人になって、それによってどんなふつづうが生じるかということを確信するにいたった。このような事情に関連してかずつの困難が発生した。私は二年あまりまえに私が銀行をさった当時おこったことをおはなししよう。そのすこしまえまでは私が割引かまたは貸付をつうじて銀行に一万ポンドの負債をおっているような株主がひとりでもあろうなどとは知らなかった。ひとところ株主のひとりが割引勘定で巨額の負債をおっているというさきやきが私の耳にはいつてきた。そこで私は出納係のひとりにこれについてたずねた。ところが私は、もしあなたが重役会の扉を自分のうしろでしめてでてゆくならば、あなたは銀行業務と無関係になるであろうという返答をうけた。またカメロン氏はいった、重役は割引のために自分の手形を重役会に呈示してはならず、それを支配人に送付しなければならない、なぜなら、もしそれを重役会に呈示するようなことがあると、堅実な商人はけっして吾々と銀行取引をおこなうとはしなくなるであろうから、と。私は、あるときカメロン氏が病氣をして重態になったときまで、この点についてなお無知のままであつた。ところが彼が病氣をしたため幾人かの重役がちよつとした調査をしたところ、特別の鍵をかけてしまつてある、いままで吾々のみたことのなかつた帳簿をカメロン氏がもつていたことが露顯した。頭取がこの帳簿をひらいたとき、吾々はまったくひどくおどろいたものだ。」

公平のために一言しておかなければならないが、カメロン氏はこの発見の結果をみとどけることなく、このう

えもない思慮と機敏さをもつて祖國イギリスをさつたのである。

ロイヤル・ブリテン銀行の業務のうちにかわつた特徴的なものの一つは、同行がウェールズの製鉄工場の一つに係属してゐたことであつた。銀行の拂込資本が総額五万ポンドであつたのにたいして、この工場一つにあつたえられた貸付は七万ないし八万ポンドの額にたつてゐた。会社がはじめて工場をひきとつたとき、工場は経営に適しない状態にあつた。工場にたいする約五万ポンドの投資によつてそれがしかるべきでいさいをととのえるようになったときには、工場はクラーク氏という人の手中にあつたが、「しばらくのあいだ」はたらいだのち「彼は莫大な資産を放棄するのだ」という信念を表明して」同工場を銀行にかへした。ところが實際は工場関係の負債をさらに二万ポンド多くして銀行にのこしてゐた。このようにしてこの企業は、それから利潤がえられる見とおしはつきりとあつたときには銀行の手からでてゆき、あたらしい貸付をうける必要があつたときには銀行に返還されたのである。重役たちは、その化けの皮がいよいよはがれるという最後の瞬間でも——なおかつ、この工場は銀行のあるあいだ年々その株主に一七、七四二ポンドずつの費用をかけたといふことはわすれて、彼らのことばによれば年に一万六千ポンドをもたらしうるといふこの工場の利益の可能性をあいもかわらずしめしながら、右のかけごとをつづけようとした。現在は破産裁判所で銀行の清算が準備されている。しかし、清算がおこなわれるよりもずっとまえに、ロイヤル・ブリテン銀行のこの全冒險は、ヨーロッパの全般的恐慌の洪水によつてのみこまれてしまふであらう。

二

—『ニューヨーク・デイルリー・トリビューン』

一八五六年十月十五日号所載 無署名—

一八四七年の秋ごろヨーロッパではじまり一八四八年の春までつづいた全般的な商業恐慌は、一八四七年の四月下旬にはじまり五月四日に頂点に達したロンドンの金融市場でのパニックによって口火をきられた。このパニックの期間中、いっさいの貨幣取引は完全に停止した。しかし五月四日以来緊張はよわまりはじめた。それで商人や新聞記者たちは、このパニックがたんに偶然的な一時的な性質のものだといってたがいに祝福しあった。ところが数ヵ月たって商業および工業恐慌が勃発したのであって、金融パニックはその恐慌にとって兆候とまえばれでしかなかったのである。

現在ヨーロッパの金融市場では、一八四七年のパニックにたうごきが生じている。しかしながら類似はこの場合完全ではない。一八四七年のときのようにパニックは西から東へ、すなわちロンドンからパリをとおってベルリンおよびウィーンへとうごいてゆくかわりに、現在のパニックは東から西へうごいている。それはドイツではじまり、そこからパリにひろがり、最後にロンドンに達したのである。さきの場合には前進運動がゆるやかだったため、パニックは局地的性格をおびていた。だが現在は、その波及が急速なことからただちにパニックが一般的な性質のものであることがわかるのである。さきにはパニックは約一週間つづいたにすぎなかったが、現

在はすでに約三週間もつづいている。當時はパニックを全般的な恐慌のまえぶれではないかと思つたものはほんのわずかであつたが、こんどはそのことをうたがうものは、『タイムズ』紙をよんで歴史をつくらうと思つてゐるようなイギリス人をのぞいては、だれひとりとしていない。また當時はどのような達眼の政治家でも、一八二五年と一八三六年とのくりかえしを氣づかつたぐらゐにすぎなかつたが、現在では彼らは、一八四七年の恐慌だけでなく、さらに一八四八年の革命のあたらしい増補版が自分たちのまえにあることを信じてゐる。

ヨーロッパの上流階級のおどろきは、その失望とおなじくらい大きい。一八四九年なかばから彼らは完全に情勢を支配してゐた。戦争だけが彼らの社会的地平線のうえにあるただ一つの雲であつた。戦争が⁽¹⁰⁾おわたつたか、あるいはおわたつたと考えられてゐるいま、彼らは、ワテルローの戦役と一八一五年の平和締結のあとで、戦時徴収にかわつて農業と工業における恐慌についての報道があらわれはじめたところにイギリス人がみいだしたのとなじことを、あらゆる國でみだしてゐる。自分たちの財産をすくうために、彼らは当時革命の鎮圧と大衆の粉碎とのためにはできるかぎりのことをした。現在では彼らは、彼ら自身が財産にたいする革命の大砲であつたこと、それも一八四八年の革命家たちが推測してゐたよりももっとずっと重要な大砲であつたことを、確信してゐる。彼らは全般的な破産に直面してゐるが、この全般的な破産は、彼らがしつてゐるとおり、当然バリ取引所の清算日と一致すべきものである。そして、われとわが首をはねた不屈の士、カースレ⁽¹¹⁾イが発狂してゐたことをイギリス人が一八一五年以後になつて発見して大いにおどろいたのと同様に、ヨーロッパの証券界は、ボナパルトの首がはねられるまえにあつてさえ、彼が総じていつか正氣であつたことがあるだらうか、と自分に問いはじめてゐる。ヨーロッパの上流階級はまた、あらゆる市場が入荷の過剰でくるしんでゐることや、これまでは傳染

性害毒には動じなかったような所有者階級の全階層までもが、いまでは投機熱のうずまきにひきこまれていることをしている。またこのうずまきからはヨーロッパのただ一つの國もまぬかれなかったことや、納税者にたいする政府の要求はぎりぎりの最後のところまでできてしまったことも、している。一八四八年には、革命を直接ひきおこした諸事件は純政治的な性格のもの——たとえばフランスでの改革の要求をもったもろもろの宴会、スイスでのゾンデルブントのたたかい、ベルリンの合同州会での討議、スペインの結婚問題、シュレスウイヒホルシュタインに起因するあらそい、等々——であった。そして革命の兵士——パリの労働者——が一八四八年にその革命を社会革命と宣言したときには、革命自体の將軍たちも他の全世界とおなじくらい不意をうたれたのであった。これにひきかえこんにちでは、社会革命はだれにでもよく諒解されていて、政治的な革命が宣言されるほどにまでなっている。しかもこの場合の革命たるや、労働者階級の秘密結社の潜行的陰謀によってひきおこされた革命ではなく、支配階級自身の所有にぞくする種々さまざまのクレディ・モビリエの大っぱらな陰謀によってひきおこされた革命なのである。

このように、ヨーロッパの上流階級の不安のうえにさらにつけくわえて、一八四八年の思想的潮流のための物質的諸條件が一八五七年につくりだされるのを促進したものはまさに革命にたいする彼らの勝利そのものであった、ということを意識したという悲哀があった。一八四九年なかばから現在の瞬間にいたるまでの全期間は、このように、ふるいヨーロッパの社会にたいしてそのいっさいの傾向を最後にもう一度凝縮したかたちでしめす可能性をあたえるために歴史から贈られたところのたんなる息つきというかたちであらわれている。政治面ではサールベルへの崇拜、道徳面では普遍的な買収とばくろされた迷信への偽善的な復帰、經濟面では生産の苦勞のない